

Aさんへ

すっかり返事を遅らせてしまいました。一応、私信という形でお手紙を頂いたのですが、内容にも互いに公にした文書の継続の内容が孕まれていて、また手紙自体に公にすることを考慮された面がみられます。提起されている内容が長年私自身が課題にし、考え続けているテーマですので、このような形でお手紙することをお許し下さい。一応了解の後公にすることということで、文を進めます。

まず、以前にも私のキータームについて触れられ、「私にはない概念」だと言われています。ここでは「運動」というタームですが、どうも「運動」ということの意味が違っているのではないかと、そこから話を始めないとどうも話がかみ合わないのではないかと思います。その背景には世界観の違いという膨大な問題が横たわっているのですが、私自身がたどってきた内容だと考えていることなのでそのことも含めて展開したいと思います。

あなたが「運動」という時抱かれているイメージは、主体の社会変革への運動ということでしょうか？また自らの思想性の展開ということでしょうか？

前にも書きましたが、私はドイツ・イデオロギーのマルクスの共産主義の規定を引用しつつ、運動をあくまで「現実の矛盾に対する闘争」と規定しています。勿論、問題は「矛盾とは？」というところに行き着き、その矛盾の解決というところで方向性の問題がでてきます。その矛盾の根源的とらえ返しから（そのことは根源的には分業と私有財産制の問題に行き着きます）社会変革の問題が出てきます。先に社会変革がある訳ではありません。

そのようなこととして、吃音者問題においても、整理できないままですが、「吃音ー吃音者とは？」という文を『ふれあい』で展開しました。ここで繰り返してもあまり意味がありません。ここではあなたも援用されているW・ジョンソンの「問題の箱」に関して、論点を明らかにしたいと思います。私は原典にあたれていません。従って、誤解を抱いているかも知れませんが、それについては指摘願いたいと思っています。あなたのy軸のとらえ方にはブレがあります。ある時には「社会の反応」というように説明していますが、ある時には「他者の反応」というように説明しています。（他者の援用では「他者の反応」というのがあるので、こちらに落ち着きそうです。）それは、あなたにとって、あなたの世界観では同じことなのかもしれませんが、私サイドからすると大問題です。私は（ここでの私というのは留保つきです）、そしておそらくジョンソンも、「問題の箱」自体を社会と規定しているのですから。おそらくジョンソンもと類推するのは、逆解釈なのですが、確か矢野さんか相沢さんが、ジョンソンを構造主義者と規定しているところが根拠です。この「問題の箱」という概念は構造主義のイメージにぴったりするのです。なぜあなたの改訂的援用が起きているのか、そこにあなたの志向性をみてとれるのです。その志向性に触れる前に、ちょっと脱線しつつ、「問題の箱」に関する私サイドからの批判をなして置きたいと思います。（先程、私はということ留保した所以です。）

それはちょうど、構造主義に対するマルクス主義からの批判（マルクス主義と言っても、これまで広く流通している曲解されたマルクス主義ではありません）、構造主義には発生論

がなく、構造を静止的にしかとらえられない、ということと類比しえます。(尤も、構造主義もポスト構造主義という流れで「構造変動論」を織り込み、そのことを止揚しようとしているという話しも聞いています。)確かに分節化の作業として、このような空間図を描いてみせる意味は全くはないとは言えませんが、逆にこのような要素主義的図式を描くことで、最も大きな落とし穴はこの空間図自体を静止的にとらえてしまい、各のベクトルに対する働きかけという論議に陥っていることです。場一空間自体を変えるという論議にならないし、またそもそもジョンソン自体が指摘しているアメリカ先住民の話はそもそもどうなるのでしょうか。それはどれかのベクトルのスカラー量が0になったから空間が消えたのではなく、そもそも空間図自体が成立しない、時代、地域があるということなのではないでしょうか。

だから、そもそもの要素に働きかけるのか?という論議は、「社会」を固定的に見、その変革を捨象したところでしか成り立たない論議なのです。

さて、手紙の中で、内須川さんの発言を引用しつつ、価値問題をあえて括弧にくくって吃音者問題を論じてきた、という主旨の文があるのですが、果たして価値問題を括弧にくくり得ているのだろうか、ということジョンソンの空間図から考えています。というのは、認識論的に命名判断と価値判断という区別立てをしますが、それは論理的抽象にすぎず、命名判断に価値判断は孕まれています。アメリカ先住民の話でも出ていますが、吃音が異化した時に既に負の価値判断が下されています。だから、吃音という(言葉を使い)ことを論じる時に、既に、負の共同主観的な価値判断の中で論じてしまっているのです。そして、そのことを批判する場合もそのようなつきまとわれの中にあらざるを得ない、という自覚を持った上で論じざるを得ないのではないのでしょうか。ジョンソンの空間図は既に、一つの共同主観性一価値観を前提にしている以上、価値観の問題を抜きにして、それにコメントしようと試みるのはトラジコメディでしかありません。

私が吃音一吃音者論を展開した時に、書いてあることは一応理解できるけど、私はそのようなところを問題にしない、する積もりはないと拒絶される何人かの人に出会いました(あなたもその一人です)。その底にその人の社会変革という指向性を否定される個人的体験の何等かがあるのでしょうか、……。そのことはその人自身が総括されたことで、また再度とらえ返されていくことですが、……。ではその人にとって吃音者問題とは何なんのでしょうか?又、私の「関係性の問題としての吃音者問題、そのことを抜きにした吃音者問題など一切無い」という論をどう批判されるのでしょうか?

さて、私の「運動」(という概念)を「思想性の展開」という風にとらえられているようなのですが、そして吃音者宣言派や矯正派の「個」の変革という方向性にまつわる「個」の実体主義的なとらえかたについて、横道にそれそうなのですがふれておきます。実はこの世界観の相異が吃音者問題のとらえかたの違いにつながっているからです。最近、やっとヘーゲルを読めました(もっとも邦訳を読んだわけではなく、読み飛ばしたという感じで、「読みました」と言える代物ではないのですが)。「思想性の展開」という図式から私は

ヘーゲルの「理念の自己展開」という図式を想定します。この図式は、青年ヘーゲル派にもおよび、ブルノー・バウアーの「自己意識」、フェイルバッハの「類的存在」、マックス・シュティルナーの「唯一者」etc、初期マルクスの疎外論もその枠内にあったと言われています。そこからマル・エンは「ドイツ・イデオロギー」の執筆を通してパラダイム・チェンジをなしたとされています（このへんは廣松氏が切り開いたとらえ方です）。もっともマル・エンの発展的解釈で、その近代知の地平のパラダイム・チェンジをとらえ返しているのは、自称他称マルクス主義者の中でも極めて少数派でしかないのです。私自身も「吃音者問題」のとらえ返しの中で、「ある」ということのとらえ返しの中で、やっとこのへんのとらえ返しに入っただけです。さてこんなことを書くと人の主体的な働きかけの問題をどうとらえるのか？という疑問を提起されるのですが、これはヘーゲルも展開している、当事者意識と第三者意識の弁証法として説明しえます。これについて展開していくと長くなるので、はしります。

さて、吃音者問題の私のとらえ方の変遷もちょうど、青年ヘーゲル派の中でマル・エンがパラダイム・チェンジをなして行った過程になぞらえることができます。そのようなこととして、他派がまだ近代知の実体主義的とらわれでの、「個」という実体の問題として、実体の属性の問題として吃音をとらえていくことを批判しているのです。

さて、話を現実的やりとりの中に戻します。

あなたは『規定』よりも『どうするか』が求められており、・・・と提起されます。けれども、どうするのかということは、それを対自化しているかどうかは別にして、「どう問題をとらえているのか」ということから出てくるのではないのでしょうか？そのへんの問題を「吃音者が何を欲しているのか」にすり替えてはならないと思います。確かに「何を欲しているのか」ということになれば、それは共同主観性の問題で「吃音が悪いもの、劣ったもの」という意識が凡通的にあるところで、様々なサンクションの中で生きてき、その共同主観性を身につけている以上、そのとらわれから完全に自由ということはありえないと思います。

たからこと、その共同主観性自体を、さらに共通の根っこの共同主観性を問題にしていくなさきではと考えるのですが、逆に宣言派はその共同主観性を超絶せんとしているのではないのでしょうか？

おそらく、そこで出てくる話は、今回もあなたの手紙の中にあった「現実の吃音者の今をどうするか」という提起なのですが、そこでかの「吃音者宣言」を支持する人達は、気持ちの持ちかたを変えることで、吃音者の問題が改善される現実がある、とされ、そのことに賭けようとされます。確かにある幅において変わることを私は否定しません。だが、逆に「気持ちの持ちかたを変えることで、吃音者の問題が改善される」ということの限界を常に感じざるを得ません。それは個人の中で、相変わらず引きずってしまっているということ、表面的なことが沈んで、深層的なことに移行しただけではと思わざるを得ません。更に、それが吃音者総体の問題としては、永遠の繰り返しの運動に過ぎなくなるというこ

とにおいて、私が批判しつづけていることです。 さて、あなたは「矯正派と宣言派に二分するには反対です。手だては異なろうとも求めている所は同じものと見ています。」とのことですが、私が二つの流れを規定するのは、レッテル貼りをするため、意識的に分けようとするのが目的ではありません。「吃音者宣言」は「どもりは悪いもの、劣ったもの」という社会的通念自体をとりあげました。そのことにおいて画期点を記しました。そのことにおいて吃音者問題の規定も矯正派と違うはずです。その画期点をどう見るのかという問題だと思います。もっとも「吃音者宣言」自体にブレがあるところで、宣言派自体がどこまで画期点を自覚的に越ええたのか？という疑問もあるのですが、現在的に揺り戻しの中で、結局「治す方法が現在的にないから、気持ちの持ちかたを変えるに焦点をあてただけ」、ということになっています。確かに「吃音者宣言」がそれだけのものだったのなら、「求めている所は同じ」だと思います。

「吃音者宣言」が出た背景には、それとセットで「治す努力の否定」ということが語られていたはずですが。矯正派にとっては、それは受け入れがたいものでした。そこにおいては「求めている所は同じ」ということは言いえなかったのではないのでしょうか。最近のI氏の文章とか「吃音とコミュニケーション」の編集方針を見ていると、確かに分ける意味などなくなっているのかも知れません。

断っておきますが、「分ける」ということは、必ずしも分派するとか、排撃するとかを意味しません。宣言派は運動の柔軟性を持ち得れば、矯正派を内包して進み得ると思います。けれども、吃音者宣言の中に孕まれていた「どもりは悪いもの、劣ったもの」ということ自体を問題にしていく姿勢においては、矯正派自身が分派もしくは排撃すると思います。それは、私の流れの運動が、現在の言友会からシャッタアウトされることと同じことです。

私は、別に「概念」規定とか世界観を大上段に構えて論争しようとしているわけでもありません。ただ、なぜ吃音者の集まりが「どもりは悪いもの、劣ったもの」という論理を前提にして進まねばならぬのか？という問い掛けに答えが欲しいだけです。 私が吃音ー吃音者論を展開した時、いつも根幹の部分での論争にならないで、枝葉の部分での反応しか返って来ません。

さて最後に実証性の問題についてコメントしておきます。私も実証性を追及しないわけではありません。でもそれは吃音者運動の障害者運動としての実証性で、運動の実際が確実にとらえられ、展望がとらえられるという実証性です。私の運動がそこまで行っていない、というより流れとしてさえ定立していないというのは事実です。 だが、実証性ということと、方向が正しいかどうか、ということが必ずしも一致するのでしょうか。しかも現在の実証性の問題と将来的実証性の問題は違うのではないのでしょうか？

私にはあなたも、Iさんも、「実証性」の名のもとで、現実の吃音者の圧倒的多数の欲求に引きずられて行ってしまっているとしてしかとらえられないのです。多数者の欲求が正しいとされるなら、極端な話し、ファシズムや戦争へ突入していくとき、どうされるのでしょうか？

今回、「論」を起こされるとお手紙頂きました。私が今まで書き続けてきたことの批判―対話を含んで、書いて頂けたら、一度は根幹でかみ合った対話をしたいと願っています。

では、だらだらと書き綴りましたが、このへんで、「論」を喉から手が出るように期待しつつ、とりあえず筆を置きます。

一九九〇年十一月十一日

S

追伸

・資料を整理されていたとか、私も資料には関心を持っています。もっとも資料と言っても関心の持ちかたの違いで、何が資料として大切なのが違って来るような気がします